第10回

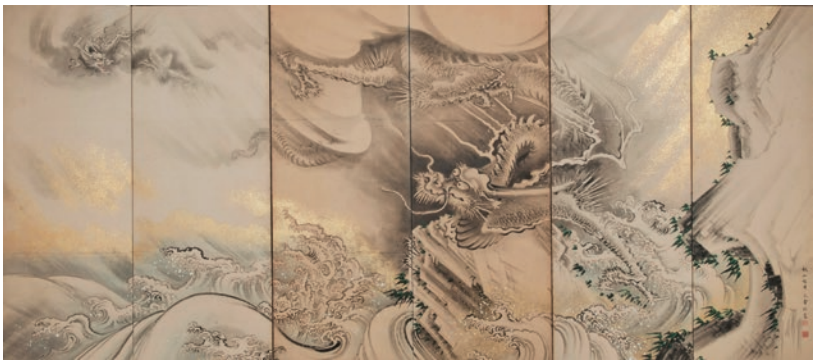
女性画家 櫻井雪保

美術門部

二点一組の大きな屏風。江戸時代の女性が描いた、「龍虎図屏風」という作品です。風が吹き波も荒立つなか、龍と虎がにらみ合う姿は迫力満点で、これから何かが起こりそうな緊迫した空気が漂っています。

問合せ／市立博物館（☎226・6521）

「龍虎図屏風」左隻（市立博物館蔵）



「龍虎図屏風」右隻（市立博物館蔵）

※「龍虎図屏風」は、状態維持のため、現在は展示していません。展示を行う際には、市立博物館ホームページ（http://shihaku1.hs.plala.or.jp）などでお知らせします。

図録

図録「知られざる女流画家 櫻井雪保ー父・雪館と歩んだ絵画の道ー」では、「龍虎図屏風」についても掲載しています。市立博物館で、1冊1,000円で販売しています。詳細は、お問合せください。

ワシントンの国立美術館で展示された際の様子

この屏風を描いたのは、水戸出身の女性画家である櫻井雪保（1754?～1824）です。雪保は水戸で生まれてすぐ、父親で画家の櫻井雪館（1715～1790）とともに江戸へ移り、雪館に絵の指導を受けて才能を開花させました。20歳前後の頃には、雪館の画塾で雪保も弟子をとって教えるなど、早くから確かな技量をもつ画家として活動しました。

雪保は、男勝りな性格だったのかもしれません。現存する作品の多くは、作者が女性だとは想像できないような力強い筆づかいで描かれています。また、江戸時代には他にも女性画家が存在しましたが、この屏風のような左隻、右隻それぞれ縦約1.5m、横約3.5mと大型の作品を描いた女性画家は珍しく、雪保が相当の力量を持っていたことがうかがえます。

そんな雪保が手がけたこの屏風は、技術も気力も熟した晩年の頃の作品と考えられます。力強さに加えて、花や虎の毛並みなどには柔らかさも感じられ、職業画家としての充実した心境が現れているかのようです。また、波しぶきを表す胡粉（貝殻の粉でできた白い絵の具）が散らされたり、所々に金の絵の具が塗られたりと、全体的に豪華に仕上げられています。おそらく、財力のある人物の依頼を受けて描いたのでしょう。

実はこの作品、縁あって2019年にワシントンの国立美術館での展覧会「日本美術に見る動物の姿」へ出品されました。多くの人々の目に触れることで、作品について新たな発見が生まれることもあります。海を渡る幸運な機会を得たこの作品と、画家・櫻井雪保について、今後も注目してください。

（水戸市立博物館美術部門学芸員　中村有紀子）

【発行】水戸市　☎029・224・1111（代表）
〒310～8610　水戸市中央1～4～1
ホームページ／https://www.city.mito.lg.jp
【編集】みとの魅力発信課　☎029・232・9107
FAX 029・224・5188　kouhou@city.mito.lg.jp